

四年壬申、藤原宇合卿、西海道の節度使

に遣はさるる時に、高橋連虫麻呂の作る歌一

首 并せて短歌

九七一番

白雲の	竜田の山の	露霜に	色付く時に	うち
越えて	旅行く君は	五百重山	い行きさくみ	
賊守る	筑紫に至り	山のそき	野のそき見よと	
伴の部を	班ち遣はし	山彦の	応へむ極み	た
にぐくの	さ渡る極み	国状を	見したまひて	
冬ごもり	春さり行かば	飛ぶ鳥の	早く来まさ	
ね 竜田道の	岡辺の道に	丹つつじの	にほは	
む時の	桜花	咲きなむ時に	山たづの	迎へ
参る出む	君が来まさば			

反歌一首

九七二番

千万の 軍なりとも 言挙げせず 取りて来ぬ
 べき 士とそ思ふ